

調査概要

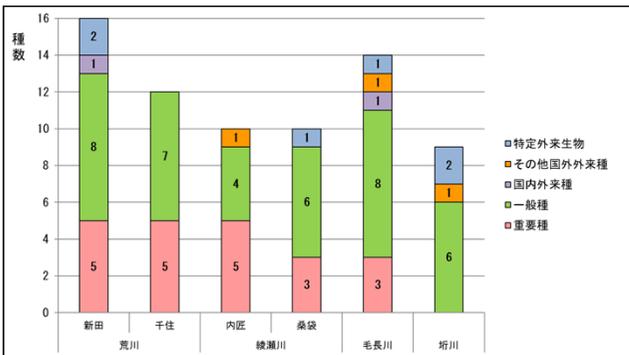
足立区内に生息する魚類を把握するために、平成30年7月～10月に荒川、綾瀬川、毛長川、圀川の4河川6地点にて魚類調査を実施した。調査は、投網、タモ網、定置網、刺網等を用いて魚類の任意採捕を実施。綾瀬川の2地点では、底生動物の採集実施。



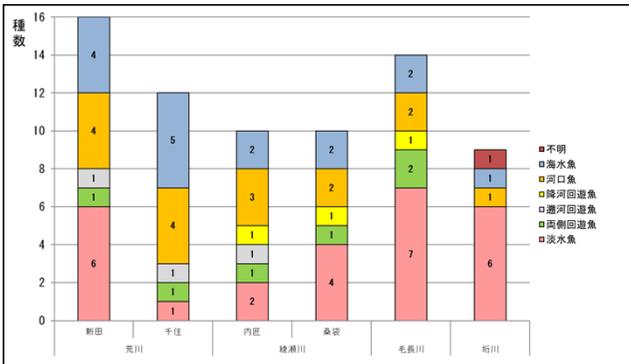
調査結果(魚類)

- ・合計6目11科26種の魚類が確認された。
- ・7種の魚類が重要種に該当した。
- ・国内外来種は2種、国外外来種は3種が該当した。国外外来種のうち2種が特定外来生物に該当した。
- ・確認種の42%が淡水魚、15%が回遊魚、39%が河口・海水魚であった。
- ・毛長川、圀川は比較的の上流に位置するため、淡水魚の割合が高かった。
- ・綾瀬川では、19種の底生動物が確認され、4種が重要種、4種が外来種に該当した。

魚類 調査地点別確認種数



魚類 生活型別確認種数



河川別調査結果

【毛長川】ふれあい橋上流付近 9月11日/12日 曇り/曇り



【調査地点概況】
両岸とも植生に覆われている。
本調査地点のうち、最も上流に位置する。

【確認種】14種
ニホンウナギ、ギンブナ、タイリクバラタナゴ、オイカワ、モツゴ、ニゴイ、スゴモロコ、カダヤシ、スズキ、ボラ、ウキゴリ、マハゼ、シモフリシマハゼ、アマチチブ



【綾瀬川】桑袋ビオトープ公園付近 7月12日/13日 快晴/快晴 10月23日/24日 雨/晴れ



【調査地点概況】
両岸とも垂直護岸であり、浅場もほとんどみられない。

【確認種】10種
ニホンウナギ、コイ、ギンブナ、ニゴイ、カダヤシ、スズキ、ボラ、マハゼ、シモフリシマハゼ、アマチチブ



【荒川】新田わくわく♡水辺広場 9月11日/12日 曇り/曇り



【調査地点概況】
抽水植物、ワンド、流入水が存在し、干潮時に干潟が形成される。

【確認種】16種
コイ、ギンブナ、ハス、マルタ、モツゴ、カダヤシ、クルマサヨリ、スズキ、ブルーギル、ヒイラギ、ボラ、マハゼ、アシシロハゼ、アベハゼ、シモフリシマハゼ、アマチチブ



【圀川】葛西用水合流地点 9月10日/11日 曇り/曇り



【調査地点概況】
両岸とも垂直護岸であり、ヨシ等の抽水植物はみられない。

【確認種】9種
ギンブナ、タイリクバラタナゴ、モツゴ、タモロコ、カダヤシ、スズキ、ブルーギル、マハゼ、旧トウヨシボリ類



【荒川】わんど広場付近 9月10日/11日 曇り/曇り



【調査地点概況】
河岸に人工ワンドが整備されており、干潮時には泥干潟が形成される。抽水植物もみられる。

【確認種】12種
コノシロ、マルタ、ニゴイ、マゴチ、スズキ、ヒイラギ、ボラ、マハゼ、アシシロハゼ、アベハゼ、シモフリシマハゼ、アマチチブ

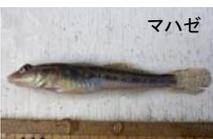


【綾瀬川】内匠橋上流付近 7月12日/13日 快晴/快晴 10月23日/24日 曇り/晴れ



【調査地点概況】
両岸とも垂直護岸で、抽水植物はみられないが、干潮時に浅場がみられる。

【確認種】10種
ニホンウナギ、タイリクバラタナゴ、マルタ、ニゴイ、スズキ、ボラ、マハゼ、アシシロハゼ、シモフリシマハゼ、アマチチブ

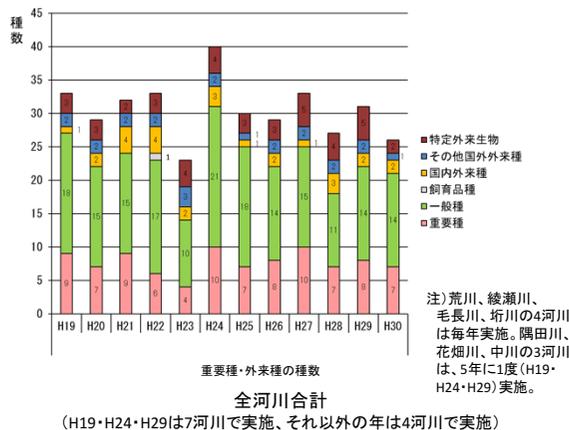


赤色の種:重要種 青色の種:国外外来種 緑色の種:国内外来種

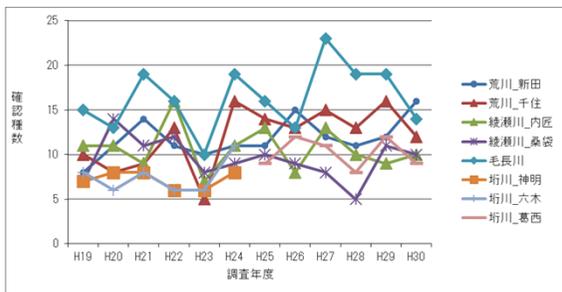
経年変化

- 平成19年から平成30年（今年度）までの12年間で、合計8目21科50種の魚類が確認されている。
- 重要種は今年度までで合計12種が確認されており、毎年4～10種の間で推移している。
- 国外外来種は今年度までに合計8種確認されており、毎年4～7種の間で推移していたが、本年は3種であった。
- 特定外来生物は今年度までに5種が確認されている。
- 毛長川は多様な生息環境を反映し、毎年多くの魚種が確認されている。
- 両岸が垂直護岸の綾瀬川、圀川では、生息環境が単調なため、例年、比較的、確認数が少ない。
- 荒川は流域面積が広く、出水等によって上流からの魚類の加入量に変化し、年によって確認数が変動するものと考えられる。
- 5年に一度実施している隅田川、花畑川、中川の3河川のH29確認種数は、いずれもH24よりも少なく、H19とほぼ同等であった。

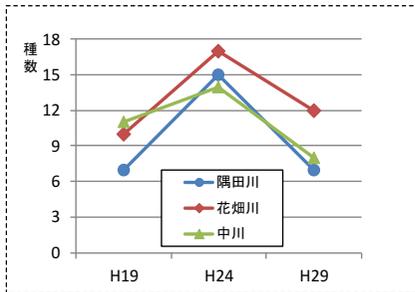
足立区内における魚類の確認種数の経年変化



調査地点ごとの魚類の確認種数の経年変化（毎年実施の4河川）



調査地点ごとの魚類の確認種数の経年変化（5年ごとに実施の3河川：今年度は未実施）



着目種

- 今年度調査では確認されなかったものの、温暖化に伴い分布域の拡大が指摘されるウロハゼ、カワアナゴが昨年度に確認されている。これらの魚類は、地球温暖化の指標になりうる種であり、今後の動向が注目される。
- H24年度から確認され始めたチャンネルキャットフィッシュは、昨年度は確認されたが、今年度は確認されなかった。しかし、H24～29年度において稚魚が確認されていることから、周辺水域で繁殖していることが懸念される。
- H24年度から継続して確認されている特定外来生物のカワヒバリガイは、今年度も確認された。本種は、大量に増加すると、水道施設等に大量に固着し、通水被害等を引き起こす恐れがあるため、今後の動向に注意する必要がある。
- 昨年度に引き続き、特定外来生物が確認されている。確認種は、魚類2種（カダヤシ、ブルーギル）、底生動物1種（カワヒバリガイ）、両生類1種（ウシガエル幼生）の合計4種であった。



平成30年度 確認種一覧

No.	目	科	種	生活型	調査地点						重要種	外来種				
					荒川		綾瀬川		毛長川							
					新田	千住	内匠	桑袋	7月	10月			7月	10月		
1	ウナギ	ウナギ	ニホンウナギ	陸河			2	1		1	1			国・EN、都・VU		
2	ニシン	ニシン	コシロ	海水		2										
3	コイ	コイ	コイ	淡水	2				2							
4			ギンナ	淡水	4				3			1	9			
5			タイリクバラタナゴ	淡水	4			1				2	17		国外	
6			ハス	淡水	3										国内	
7			オイカワ	淡水								1				
8			マルタ	遡河	1	1	2								都・留	
9			モツゴ	淡水	5							1	38			
10			タモロコ	淡水									12			
11			ニゴイ	淡水			3	2	1	1	3	8			都・NT	
12			スゴモロコ	淡水									31		国内	
13	カダヤシ	カダヤシ	カダヤシ	淡水	1					1	12	1			特定	
14	ダツ	サヨリ	クルマサヨリ	海水	2										国・NT	
15	スズキ	コチ	マゴチ	海水		1										
16		スズキ	スズキ	海水	13	21	7	1	11	1	12	2				
17		サンフィッシュ	ブルーギル	淡水	1								67		特定	
18		ヒイラギ	ヒイラギ	海水	5	21										
19		ボラ	ボラ	海水	11	5	1		2			16				
20		ハゼ	ウキゴリ	両側								4				
21			マハゼ	河口	7	18	10	2	2		10	1				
22			アシシロハゼ	河口	3	3	1								都・留	
23			アベハゼ	河口	21	16									都・NT	
24			旧トウヨシノボリ類	不明												
25			シモフリシマハゼ	河口	2	10	4	3		2	4					
26			ヌマチチブ	両側	6	2	8	16	6	8	10				都・留	
合計	6目	11科	26種		種数	16	12	9	7	7	6	14	9		7種	5種
					個体数	87	103	37	25	27	16	113	149			

注1: 種名及び配列は「河川水辺の国勢調査のための生物リスト 平成30年度生物リスト 河川環境データベース」に準拠した。
 注2: 生活型の区分は、加納光樹・小池哲・河野博（2000）東京湾内湾の干潟域の魚類相とその多様性、魚類学雑誌47（2）:115-129を参考とした。
 注3: 重要種（赤色で示した種）
 国：EN・・・環境省RL（2018）の絶滅危惧ⅠB類、国：NT・・・環境省RL（2018）の準絶滅危惧
 都：VU・・・東京都RDB（2013）区部における絶滅危惧Ⅱ類、都：NT・・・東京都RDB（2013）区部における準絶滅危惧、都・留・・・東京都RDB（2013）区部における留意種
 注4: 国外外来種（青色で示した種） 特外・・・特定外来生物 国外・・・国外外来種
 注5: 国内外来種（緑色で示した種） 国内・・・国内外来種（国内の他の領域から人為的に移入された種）
 ※ハス及びスゴモロコは重要種に該当するが、関東では国内外来種に該当するため、重要種の選定から外した。
 ※表中の数字は確認個体数を示す。

	調査地点	確認種		合計
		底生動物	桑袋ビオトープ公園付近	
	内匠橋上流付近	ミマサカジーカイメン、ヒメタニシ、カワヒバリガイ、カワゴカイ属、ユリミズ属、テナガエビ、クロベンケイガニ、モクスガニ、シオカラトンボ、アメンボ、ユスリカ属		11種
	桑袋ビオトープ公園付近	シマミズウドンゲ、ヒメタニシ、カワコザラガイ、カワヒバリガイ、エラオイミズミズ、エラミズミズ、ユリミズ属、トガリミズミズ属、テナガエビ、クロベンケイガニ、ベンケイガニ、ムネカクトビケラ属、オオマリコケムシ		13種

まとめ

- 足立区には、様々な環境の河川が存在し、それぞれの河川には特徴のある魚類相が形成されている。
- 調査河川は、海域との連続性は高いが、周辺水域との連続性は比較的低く、また、両岸直立護岸の直線的な箇所が多いため、調査河川内にも事例があるように、河川と連続性を持たせ、魚類の生息・産卵環境となるような、池や湿地等のビオトープや人工的なワンド・干潟などの環境を増やしていくことが望まれる。
- これまでの調査では、外来種が多く確認されており、在来種への悪影響が懸念されていることから、観賞魚等を野外に放たないといった啓発活動も必要である。

